

## 編 集 後 記

平成26（2014）年は、歯学会員の皆様にとりまして、どんな年だったでしょうか。本年9月の歯科基礎医学会総会で、2年後の学術大会を本学歯学部基礎系分野が主催し、2016年8月24日から26日までの3日間、札幌コンベンションセンターを会場として開催されることが正式に決定しました。改めて責任の重さをヒシヒシと感じております。政治の世界では、年末の総選挙で、2年間のアベノミクス、集団的自衛権、原発再稼働等にたいする国民の厳正な審判が下されました。残念ながら村上春樹氏は今年もノーベル文学賞をのがしましたが、「青色LED」の研究で3人の日本人が物理学賞を独占しました。恥ずかしながら、このビッグ・ニュースを聞くまで、日本人研究者の貢献がこれほど高く評価されていることを知りませんでした。2年前にノーベル医学・生理学賞を受賞した山中伸弥教授のiPS細胞が、「加齢黄斑変性」という失明にいたる網膜病変の治療に、初めて応用されました。今後、治療分野のさらなる拡大が期待されます。昨年、防空識別圏の設定で一触即発の危機を演出した巨大な隣国は、今年もAPECでの奇妙な握手と「赤サンゴ」に群がる密漁船という後味のわるい印象を残しました。奇妙な握手でも半歩前進と前向きにとらえるべきでしょうか。

さて本号の巻頭には、生体材料工学分野に着任されて間もない根津尚史准教授に、専攻分野の紹介を兼ねて「物理化学と歯科材料学の接点」という総説を執筆して頂きました。学内外で共同研究の輪が大きく広がることを期待しております。残念ですが、本号には原著論文の投稿がありませんでした。現在、若手研究者からの投稿促進策として、研究奨励金制度が運用されています。これに加えて、新年度から年齢制限の無い「優秀論文賞」がスタートします。その年に掲載された原著論文の中から、最優秀論文賞1報と優秀論文賞2報が選考され、各々の第1著者にご褒美が授与されます。インパクトファクターのある海外の一流誌に投稿するか、本誌の優秀論文賞をねらうか、迷う人が増えるかも知れません？新年度、34巻1号から編集長を生理学分野の石井久淑教授にバトンタッチします。石井編集長には、オンライン化等で著しく変化する科学雑誌の最新の動向を取り入れ、歯学会員の研究マインドを刺激する斬新な企画を期待しております。(田隈 記)

次号（第34巻、第1号）の発行は平成27年6月30日です。

投稿原稿募集の締め切りは平成27年3月31日必着と致します。期日厳守の上、ご投稿をお願いします。本誌投稿規定は、2014年第33巻、第2号の巻末をご参照ください。